

「言語活動」を通して小学生が英語の語彙・文法を学ぶための 絵本活用法

Teaching English Words and Grammars to Elementary School Pupils through Activities Using English Picturebooks

早川 知江 HAYAKAWA Chie
(教育学部)

0. はじめに

本稿は、小学校英語教育で英語絵本を効果的に活用しようとする研究の一環である。5、6年生で外国語科が2020年度から教科化されるなど、小学校での英語教育はますます重要性を増している。本稿は、英語絵本を使って教師と児童がやり取りする「活動」を通して、児童の英語力を向上させることを目指す。

英語教育の場で絵本を読み聞かせる際、重要なのは、絵本の内容を補足したり、絵本の絵やストーリーについて問いかける教師の発話技術である。これらの発話は英語による方が、日本語によるものより児童の英語の返答を引き出し、英語コミュニケーション力を向上させるという研究が複数ある（一例として萬谷 2009）。しかし実際の教室では、教師の英語が理解できずに、児童が黙り込んでしまう状況も頻繁に起こる。そのため教師は、児童に分かりやすく問いかけたり、その問いが通じなかったときに効果的なヒントを出す技術を身につける必要がある。

早川（2022, 2023）は、小学校の教師や、教師を目指す大学の小学校教員養成課程（以下「小免課程」）学生が、英語力や英語の絵本読み聞かせ技術を伸ばすための教材を提案してきた。本稿は、その延長線上に位置する研究として、児童が教師の英語が理解できない場合の教師の対応に注目する。特に、言語による「問いかけ直し」については既に早川（2023）で扱ったため、本稿は、並行して用いることのできるもう一つの方策として、絵本の絵を利用して児童に教師の英語発話の意味を推測させる技術を提案する。その際、機能言語学の一派である選択体系機能理論（Systemic Functional Linguistics；以下SFL）の枠組みによる画像の分析理論を用い、絵が表す「意味」には、内容的、対人的、情報構成的の3タイプがあること、それぞれの意味に注目することで、児童に多様なヒントが出せることを示す。

第1節はこれまでの研究のまとめで、早川（2022, 2023）の概要をまとめる。第2節は「絵で英語理解を促す」とはどういうことかを、実際の絵本を例として用いながら示す。第3節はまとめで、日本語訳に頼らない英語コミュニケーションを成り立たせる上で、英語教育における絵本利用の意義を論じる。

1. 早川（2022, 2023）の概要と問題の所在

1.1 早川（2022）の概要

2011・2020年度からそれぞれ小学校で必修化された「外国語活動」「外国語」においては、教師が「英語で英語を教える」ことが、義務ではないが推奨されている（小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編 p. 48）。それにも関わらず、自らの英語力に不安を感じている小学校教員が多いという課題がある。早川（2022）は、大学の小免課程、特に「外国語の指導法」（本学においては「外国語科指導法（英語）」）の授業で利用できる新しいタイプの教室英語表現集を提案することで、将来の小学校教員の英語力向上を目指した。

教室英語表現集は、以下の形ですでに多くのものが利用されている：

- ・大学の小免課程での使用を想定した教科書やその付録
- ・県教育委員会や教育センターが提供するウェブサイト
- ・市販の小学校教室英語表現集

早川（2022）は、それらの媒体に掲載されている英語表現が、教師にとって使いにくく、また教師を目指す学生や児童にとってもレベルが高すぎる場合があることを明らかにした。教師にとって使いにくいというのは、多くの教室英語表現集が「授業を始める」「児童に指示する」「児童を褒める」「授業を締めくくる」などの「機能」を見出しとして表現を集めており、例えば「絵本の読み聞かせ」という「場面」で使う表現を知るには、さまざまな見出しの中から適切な表現を探し出さなければならない。また、レベルが高すぎるというのは、小学校で児童が学ぶことが想定されている「600～700語」（小学校学習指導要領（平成29年告示）p. 158）の単語レベルや、第1、2、3文型（SVCの第二文型については、Vはbe動詞のみ）までしか取り扱わない（同 p. 159）という文法レベルを逸脱した語や文が用いられているという問題である。

早川は（2022）はこの問題を解決するため、「絵本読み聞かせ活動」という場面に限定し、以下の作業を行なった：

- (1) 市販の小学校教室英語表現集3冊の中から、絵本読み聞かせ時に教師が児童にコメントしたり質問したりするのに使用できる表現を抜き出す
- (2) その中から、「小学校英語教育に適切な語彙・文法的レベル」を超えている表現を抜き出す
- (3) それらの高度な表現を、「小学校英語教育に適切な語彙・文法レベル」に沿って書き換える

これにより、教師が自信をもって使え、児童にもわかりやすい、平易な教室英語表現集の作成と提案を行なった。

(3)の手順について一例のみ挙げると、I'm now going to read you a story. (これからお話を読んであげますね) という市販の教室英語表現集中の表現は、以下の点で「小学校英語教育に適切な語彙・文法レベル」を超えている。つまり、「read 人 モノ」の第4文型をとる文であり、be going to (これから～するつもりです) の熟語も小学校の学習範囲ではない。そのため、ほぼ同じ意味と機能を持つ、It's a story time! (お話の時間ですよ) などの第2文型に書き換えるということである。

1.2 早川(2023)の概要と、本研究の位置付け

早川(2022)での試作教材作成を受け、早川(2023)では、実際に小免課程学生(2022年度前期「外国語科指導法(英語)」受講生36名)において、教師役1名と児童役5名からなる6名ずつのグループ6つを組んでもらい、試作した教室英語表現集を使用して模擬英語絵本読み聞かせを行ない、実践検証を行なった。その結果、早川(2022)で提案した表現集にも、まだ以下のような難しすぎる側面があることを明らかにした：

- (1) 「平易な」はずの表現であっても、教師役の受講生が正確に使いこなせない場合がある
 - ① 英語表現が思い出せず、日本語の問いかけになってしまう
 - ② 表現集に載っていた表現を、単語や文法を間違えて使ってしまう
- (2) 「平易な」はずの表現であっても、児童役の受講生が意味を理解できない場合がある
 - ① 児童が、教師の発話の意味を取り違えて返答してしまう
 - ② 児童が、教師の発話の意味を理解できず答えられない(または日本語で聞き返してしまう)
- (3) 児童役の受講生が英語を理解できないと、教師役が咄嗟に日本語で言い直してしまう

そのため早川(2023)は、(2)のように児童が教師の発話を理解できない場合の対処法として、CDS(Child-Directed Speech; 大人や年長者が子どもに話しかける時の話し方全般を指す用語)に関する理論を応用し、「使用した英語をより平易な表現に言い換える」方策を提案した：

1. 同じ表現を、ゆっくり、はっきりと、一番聞き取ってほしい単語を強調しながら繰り返す
2. 意味が通じる範囲で単語数を減らして発話し直す(+ジェスチャーで意味を補う)
3. 子どもの状態に合わせた、より具体的な言い方に置き換える
4. WH疑問文をYes/No疑問文に置き換える、あるいは返答の選択肢を示す

早川 (2023) では、早川 (2022) で提案した試作教室英語表現集に載っている全ての表現に対し、その表現が児童に通じなかった場合の「言い換え」表現を提案した。ここでは、方策2-4.に基づく言い換え例を、以下に1つずつ示す：

【方策2に基づき、単語数を減らしてジェスチャーで補う】

What are we going to read today? (今日は何を読むのかな?)

→ What story? (何のお話?) *絵本を掲げつつ、子どもを見渡して

【単語数を減らすとともに、方策3に基づき、around me (私の周り) をより具体的な here (ここ) に】

Please come around me. (私の周りに集まって)

→ Come here. (ここにきて) *自分の周りを指差しながら

【単語数を減らすとともに、方策4に基づき、WH 疑問文に対して返答の選択肢を示す】

What's in this box? (この箱の中には何があるかな?)

→ What's inside? A book? A pencil?... (中には何がある? 本かな? 鉛筆かな?) *箱を指差しながら、ありうる選択肢を順に提示

これらの一連の研究でターゲットにしたのは、教師の「話し方」、すなわち、どのような教室英語を用いるか、児童に英語が通じなかった場合、どのような言い方で問い直すかである。しかし、コミュニケーションを促進するために対面の教室で用いることのできる方策は、言語だけではない。本稿では、これまでの研究に基づきつつ、それらの技術を補完するようなまた別の教師の技術、すなわち絵本の絵という視覚的要素をうまく利用して、児童に発話を理解させる方法を考える。

2. 絵で英語理解を促す

第1節に記したのは、児童が教師の英語発話を理解できなかった場合に、教師が「ことばの使い方」を工夫することによって児童の理解を促す方策である。本節ではこれに対し、特に絵本読み聞かせ活動において、「絵本の絵を利用する」ことで児童の英語理解を促す方法を提案したい。すなわち、絵本文や教師の発話の英語が理解できない児童に対し、絵本の絵が表す意味内容に注目させることで、視覚的に英語の内容理解を促すのである。

本稿では主に SFL の枠組みによる画像の分析枠組を用いて、「絵が表す意味」には3種のタイプがあること、絵によって別のタイプの「意味」を用いてヒントを出せることを示す。

2.1 内容的意味を利用して英語理解を促す

絵本の絵が表す意味を利用して児童に英語理解を促す最も単純なケースとして、まず絵に描かれた「人・もの」に注目させる場合を見てみる。例として、Bill Martin Jr. と Eric Carl による絵本 *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* を考えてみる。

この作品には、さまざまな色の動物が順に登場する。まず茶色いクマが描かれたページでは、*Brown Bear, Brown Bear, what do you see?* (茶色いクマさん、茶色いクマさん、何が見える?) という本文に続き、クマの返答という想定で *I see a red bird looking at me.* (ボクを見つめる赤いトリが見える) というセリフが記される。ページをめくると、今度はその red bird の絵が描かれ、あとは、*Red Bird, Red Bird, what do you see?* (赤いトリさん、赤いトリさん、何が見える?)、*I see a yellow duck looking at me.* (私を見つめる黄色いアヒルが見える) のように、新しい動物が見えるパターンが反復される。以下、登場する動物の色と種類が置き換わっていき、順に a brown bear (茶色いクマ)、a red bird (赤いトリ)、a yellow duck (黄色いアヒル)、a blue horse (青いウマ)、a green frog (緑のカエル)、a purple cat (紫のネコ)、a white dog (白いイヌ)、a black sheep (黒いヒツジ)、a gold fish (金色のサカナ)、a teacher (先生)、students (生徒たち) が登場する。

こうした絵本は、教師がうまく児童の返答を引き出すことができれば、読み聞かせ中のやりとりによって、色を表す単語、動物を表す単語、色を尋ねたり答えたりする表現に慣れしませるのに適している。しかし、実際の読み聞かせ活動では当然、児童が教師の問いかけた英語を理解できなかつたり、質問は理解できても何を答えてよいか分からず、やりとりが成立しないことも多い。そうした場合、教師が質問を日本語で言い直してしまうのは、児童に「黙っていれば先生は日本語で言い直してくれる」という習慣をつけさせ、英語を聞こうとする態度を損なってしまう (佐藤 2018: 13) ため、避けるべきである。かと言って、同じ質問を何度も繰り返したり、他の児童に質問したりして、児童が「答えられなかった」ことを強調するのも、児童の間違いを指摘することが情意フィルターを高めて児童の学習を妨げるという Krashen の「情意フィルター仮説」に反する (白井 2012: 105)。そこで本稿は、ことばによらない意味手段である絵をうまく活用し、日本語訳に頼らず、かつ児童に「英語がわからない」というプレッシャーを与えずに、英語理解を促す方策を提案したい。

具体的には、どのようなヒントの出し方があるだろうか。例えば、絵本を読んだ後に、*What color is the frog?* と質問しても児童が答えられない場合、①単語単位の難しさと、②文単位の難しさがある可能性がある。つまり、① frog が何か分からないか、②質問全体の趣旨が分からないか、のいずれかである。そこで順に、以下のように絵を活用することで、英語理解を促進し、やりとりを誘導できるだろう：

① frog が何か分からない場合

教師は児童にもう一度絵を見せ、カエルの絵を指差しながら、This is the frog. What color is it? (これがカエル。何色かな?) と繰り返す。この場合、frog という音を発音しながら、教師の指がカエルの絵を指しているため、音と意味の関係を児童が推測するのは易しい。ここで「緑」とか「Green」という返事が得られれば、教師のヒントは有効だったと言える。

ここで注意したいのは、小学校英語教育においては、教師の英語の問いかけに、児童が「緑」のように日本語で答えても、注意しないのが定説となっていることである。なぜなら、コミュニケーションという側面からみると、たとえ日本語による返答でも、児童が「カエルは何色か」という質問を正しく理解し、「緑」と意味的に正しい情報を返そうとしたことは確かだからである。そのため、教師は That's right, green. (その通り、緑ね) のように、まず児童の返答に承認を与え (=That's right)、その後正しい英語を聞かせる (=green) ことが望ましい。それにより、児童は自分の発言が間違っていたとか不適切だったというマイナスの評価を受けずに、かつ理想的な返答 (green) を聞く機会が得られる。

② 文の意味が分からない場合

上記の方策によっても児童が答えられない場合、frog という単語ではなく、What color is...? という文自体が理解できていない可能性がある。文の意味を絵で理解させるというのは難しそうだが、絵本のパターンを利用すれば比較的容易にヒントを示すことができる。というのは、この絵本の場合、ページをめくるごとに順に色と種類の異なる動物が現れるパターンになっているからである。そのため、赤いトリや黄色いアヒルが実際に描かれたページを順に繰り返しながら、The bird is red. (トリは赤色)、The duck is yellow. (アヒルは黄色) と確認していけば、児童たちは、「今は色の話をしているのだ」と理解するだろう。その後、カエルのページで What color is the frog? と繰り返せば、green という返答を導きやすい。

このように、絵の助けを借りて言語活動を成立させることにより、児童に心理的な負担を与えずに、英語を英語のまま理解する機会を与えることができる。ここでヒントを出すのに利用した「絵の意味」は、茶色いクマや緑色のカエルが描かれているという絵の「内容」であった。しかし、絵の表す意味はそれだけではない。SFLの理論枠組みで画像や絵の分析を行なった Kress and van Leeuwen (1998; 2006) や Painter, Martin and Unsworth (2011; 2013) によれば、絵も、言語と同じように、以下の3種類の意味を表す表現手段をもっているという：

- ・ 内容的意味：絵に何が描かれているか、何が起きている絵か
- ・ 対人的意味：
 - ・ 絵が鑑賞者にどのような「やりとり」を求めているか
 - ・ どのような「視点」で描かれた絵か
 - ・ どのような「雰囲気」が作られているか など
- ・ 情報構成的意味：絵や字のレイアウト
 - ・ ページの枠・余白の有無
 - ・ 複数の人・ものが配置されている場合、中心があるか並列か
 - ・ 人・もののグループ化 など

本稿は、上記の先行研究に基づき、絵のもつ3つの意味すべてを活用して言語理解を促すことで、教師はよりヒントを出しやすく、児童はよりやりとりに答えやすくなると提案する。というのは、絵本の内容や構成によっては、絵のもつ1タイプの意味だけではヒントが出しにくかったり、ヒントになる手がかりが見つけれない場合もあるからである。ヒントの選択肢が多いほど、教師は気軽にそれを利用することができる。本節で示したのは、絵の「内容的意味」に着目した例であった。以下で順に、「対人的意味」「情報構成的意味」を利用した方策の例を見ていく。

2.2 対人的意味を利用して英語理解を促す

対人的意味とは、社会の中で人と人が相互作用をするための意味（Halliday and Matthiessen 2004: 29-31）である。ことばであれば、平叙法、疑問法、命令法を使い分けることによって、相手に情報を与えたり、情報を求めたり、ものや行為を要求したりして、人とやり取りできる。この、情報やもの・行為を与えるか求めるかという選択も対人的意味の1つである。

絵や画像にも、対人的やり取りを可能にする選択肢がある。例えば画中の人物が鑑賞者の方を見ていないように描かれている場合、画中の人物は「見られる」対象であり、鑑賞者に対し一方的に情報を提供している。しかし例えば募金を呼びかけるようなポスターで、画中の人物が鑑賞者の方を見つめているように描かれていたら、鑑賞者は逆に画中の人物に「見られる」対象となり、その視線によって例えば「募金すること」あるいは「募金がなぜ必要か考えること」を要求するという意味が生まれるだろう。

対人的意味には他にも、「視点」の選択があり、例えば画中の景色を描くアングルの選択（高いアングルからの絵は「大人が見た景色」を表し、低いアングルからの絵は「子どもが見た景色」を表すなど）や、特定の登場人物から見たように描く（その人物自身は「視点」であり、画中に現れない）か鑑賞者が全体を俯瞰するように描くか、などの選択肢がある。また絵の全体的な「雰囲気」も重要な対人的意味の1つで、絵や画像が何を描

いているか (=内容的意味) 以外に、それらをどのような色調 (モノトーン、フルカラー、明度の高低、暖色系、寒色系、など) で描くかなどによって具現される。

本稿では、絵本の絵が表す対人的意味を利用して児童に英語理解を促すケースとして、Eric Hill による *Where's Spot?* を例にとる。この作品は、母犬がいなくなった子犬の Spot を探す過程を描いた物語で、部屋の中の家具の扉や蓋がめくれるフリップになった仕掛け絵本である。読者は、ページに仕掛けられたフリップをめくってその下に Spot がいるかを確認することで、母犬と一緒に Spot を探すことができる (実際には、Spot は最後のページまで見つからず、フリップをめくると毎回、違う動物が潜んでいることが明らかになる)。本文は主に、Is he behind the door / under the rug / inside the basket? (Spot はドアの後ろ / 絨毯の下 / バスケットの中にいるかしら?) —No. (いいえ、いません) というやりとりの反復である。この絵本を読み聞かせるならば、ぜひ教師は Is he behind the door / under the rug / inside the basket? まで読んだところで間をとり、児童に No! と答えさせるやりとりを楽しみたい。

しかし、教師が Is he behind the door? (Spot はドアの後ろにいるかな?) と質問しても、返事が返ってこない、すなわち児童が質問の意味が分からない場合、この絵本の絵はどのようなヒントを提供してくれるだろうか。絵に込められた対人的意味を考えると、この場合、「フリップがめくれる」という仕掛け自体が、読者に対し「めくって Spot を探し、いるかいないか情報提供する」という行為を要求している。こうした対人的意味を、教師が児童とのやりとりを成り立たせるために利用できる。

すなわち、質問に対し答えがなければ、教師はもう一度絵を見せつつ、What do you think? (どう思う?) Is he behind the door? (ドアの後ろにいる?) と言いながら自分でフリップを開いて見せ、そこに Spot ではなくクマが描かれていることを示しながら、No. It's a bear. (いないね。クマさんだったね) と答えてみせるといいだろう。この場合、Is he...? という発話が疑問文であり、教師は Spot の在 / 不在情報を求めていることを、フリップをめくる動作そのもので示唆できる。こうした手本を見せたのち、再び次のページで Is he under the rug? (絨毯の下にいる?) と尋ねれば、今度は児童たちも自発的に No! (いないよ!) と答えてくれるだろう。

2.3 情報構成的意味を利用して英語理解を促す

情報構成的意味とは、内容的、対人的に生み出された意味を、情報として組織するための意味 (Halliday and Matthiessen 2004: 29-31) である。例えば、「風は、今日は強い」と「今日は、風が強い」は内容的にも対人的にも同じ意味だが、「情報の出発点」が異なっている。前者はおそらく、「風」をテーマに話が進んできて、その「風」を出発点として「それが今日はどうかというところ……」という観点で情報を組織している。一方、後者は、「(他日との対比の中での) 今日」を語るというテーマの中で、「今日という日の特徴

を述べると……」という観点で情報を組織している。このような、節単位だけでなく、談話全体での情報の組織のしかたも情報構成的な意味である。

画像にも、絵や字のレイアウトによって情報を組織する選択肢がある。例えば絵本の場合、絵の周りに余白をとるかとらないかという選択肢があるが、余白は絵の世界を一種「額縁に入った」ものとして客観的に提示するのに対し、余白がない場合、読者が入り込めるような「ほんもの世界」として提示する。

情報構成的意味には他にも、「配置」の選択がある。例えば1つの画面中に複数の人物やものを描く場合、全ての構成要素を平等に客観的に提示する（規則正しく等間隔で並置する）場合と、曼荼羅のように、中心に目立たせて配置するものと、その周りを囲むものとを区別するという選択肢がある。また要素どうしの「グループ化」も重要な情報構成的意味の1つで、画面上に複数のアイテムを描く場合、それらが互いに独立しているように等間隔で配置することもできるし、逆に、いくつかのアイテムをより近づけて描いたり、共通する色や模様を付して描いたり、間に境界線を描くことでグルーピングすることもできる。

本稿では、絵本の絵が表す情報構成的意味を利用して児童に英語理解を促すケースとして、Yoshio Nakae（中江嘉男）と Noriko Ueno（上野紀子）による *Little Mouse's Red Vest*.（『ねずみくんのチョッキ』英語版）を例に考えてみる。作品としては、ねずみくんがおかあさんに編んでもらったチョッキが、代わる代わるやってくる動物たちに貸すうちに、伸びて使い物にならなくなってしまおうというストーリーである。本文は動物たちのセリフだけから成り立っており、以下のようなやり取りが繰り返される：

“That’s a nice vest you’re wearing, Little Mouse. May I try it on?”

（いいチョッキ着てるね、ねずみくん。着てみてもいい？）

“Sure!”

（もちろん！）

“It’s just a touch tight on me, but I look good in it, right?”

（ちょっときついけど、でも僕に似合うよね？）

その時点でチョッキを着ている動物によって、Little Mouse の部分が Little Duck（あひるさん）や Little Monkey（サルくん）に変わっていく。これらの動物が順に「より大きい」ものに移り変わっていくため、チョッキは少しずつ伸びてしまうのである。最終的に、ゾウに着られて伸び切ったチョッキをネズミくんが発見するところで物語は終わる。

このように、この作品は動物たちの「大きさ」がストーリーを理解する重要なポイントとなる。教師はページをめくりながら、Is Little Mouse small?（ねずみくんは小さいかな?）、Which is bigger, Little Mouse or Little Duck?（ねずみくんとアヒルさん、どっち

が大きい?)などと問いかけることによって、だんだんと大きい動物の手に渡っていくためにチョッキが伸びていくことや、着るたびに毎回「ちょっときつい」感じがする理由を理解させることができる。

この絵本は、情報構成的意味を巧みに使って、動物たちの「大きさ」を表している。通常、絵でもの「大きさ」を示すのは難しい。というのも、絵に描かれたものは実物大ではないため、その絵本の世界で相対的にどれくらいの大きさなのかが鑑賞者に伝わりにくいからである。例えば新車のポスターがあったとして、その車がどれくらいの大きさなのかは、車を単独で描いた場合には鑑賞者には伝わらない。同じ画面上に人物を描き込めば、その人物との相対関係によって大きさが示唆される。

この絵本の場合、各ページに設けられた余白が、動物の大きさを相対的に示す尺度として機能している。すなわち、どのページも同じ草色の背景で描かれ、その四方を常に白い余白が囲んでいる。この共通の白い「枠」に対して小さく描かれているねずみくん(実際、背の高さが「枠」の高さの1/10ほどしかない)は、「小さい」存在であり、「枠」からはみ出して描かれるゾウは「大きい」存在である。こうした登場人物の提示のしかたも、重要な情報構成的意味である。

こうした情報構成的意味を利用して、やりとりを促すことはできるだろうか。絵本を読みながら、Is Little Mouse / elephant small or big? と質問しても、返事が返ってこない、すなわち児童が質問の意味が分からない場合、以下のようなジェスチャーで、「枠」の大きさとねずみくん / ゾウの大きさ比較して見せることが有効だろう：

Look at this page. (このページを見てごらん)

と言いながら人差し指と親指を開いて余白の大きさを示す。

Little Mouse is... very small. (ねずみくんは……すごく小さいね)

と言いながら、人差し指と親指の距離を縮めてねずみくんを上下にはさみ、枠の大きさとの差を示す。

Now, look at this page. (今度はこのページを見てごらん)

と言いながら人差し指と親指を開いて余白の大きさを示す。

The elephant is... very very big. (ゾウは……すごくすごく大きいね)

と言いながら、人差し指と親指の距離をさらに広げてゾウの大きさを示し(実際には大きすぎて指が届かないが、それでよい)、枠よりさらに大きいことを示す。

このように、基準となる余白枠との差に注目させることで、聞かれているのは登場人物の大きさだということを示唆することができる。その後改めて Is Little Mouse / elephant small or big? と尋ねれば、聞かれていることを児童が理解する助けになるだろう。

3. まとめ：英語教育における絵本利用

ここまで、数冊の絵本で事例を示しながら、絵本の絵を利用することで児童の英語理解を促す方策を見てきた。本稿で示したポイントを以下にまとめる：

- ・ 小学校英語教育においては、「平易な」つमりの問いかけでも児童に通じないことは多い
- ・ 英語絵本読み聞かせ活動の中では、絵をヒントとしてうまく活用することで、日本語に訳さなくても言語活動が成り立つ
- ・ 児童が英語を理解できないからといって安易に日本語に訳さないことで、英語だけでやりとりする習慣が付き、児童のコミュニケーション能力や、英語に対する自信がつく
- ・ 絵は「誰がどこで何をしている絵か」という内容的意味だけでなく、対人的意味、情報構成的意味も含めた3種類の意味をもっている
- ・ そのことを教師が知り、それぞれの意味を児童へのヒントとして活用できれば、児童へのヒントのバリエーションが増え、言語活動を促進する技術が上がる

絵本の読み聞かせは、教師と児童が英語で自然にやり取りできる話題を物語や絵の形で提供してくれる、英語教育に非常に適した活動である。この活動をより有効に機能させるためには、教師が、児童への語りかけ方や問いかけ方といった発話技術を向上させなければならない。「発話技術」といった際に、教師が使う英語自体に働きかける研究は多くあるが、本稿で示したように、絵本読み聞かせという活動の特色である絵をうまく活用することで、児童の理解を促し、英語が英語のまま理解できたという自信や、英語でやり取りできたという喜びを児童に与えることができれば、教師の指導技術は大いに向上するだろう。児童が楽しんで英語を身につけるために教師が工夫できることは何か、という視点で、今後も絵本、読み聞かせ、教師の発話技術に関する研究と提案を続けたい。

使用絵本（使用順）

Bill Martin Jr., Eric Carl. (1992) *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* ISBN: 978-0-8050-9244-8

Eric Hill. (1990) *Where's Spot?* ISBN: 978-0-399-24046-1

Yoshio NAKAE, Noriko UENO. (英語版2007) *Little Mouse's Red Vest*. ISBN: 978-1741264432

参考文献

Gardner, B. and Gardner, F. 著、松川禮子 監修、平松貴美子 日本語版翻訳・執筆『小学校ではじめて英語を教える先生のための 教室英語ガイド』Oxford University Press. 2005年

Halliday, M. A. K. and Christian M. I. M. Matthiessen. *An Introduction to Functional Grammar*. 3rd Ed. London: Hodder Arnold. 2004

Kress, Gunther and Theo van Leeuwen. "Front pages: (the critical) analysis of newspaper layout." In

- Allan Bell and Peter Garrett (eds.) *Approaches to Media Discourse*. 186-219. London: Blackwell. 1998
- Kress, Gunther and Theo van Leeuwen. *Reading Images: The Grammar of Visual Design*. Second edition. London: Routledge. 2006
- Nikolajeva, Maria and Carole Scott. *How Picturebooks Work*. New York: Routledge. 2001
- Painter, Clair, J.R. Martin and Len Unsworth. "Organizing Visual Meaning: framing and balance in Picture-Book Images." In Shoshana Dreyfus, Susan Hood and Maree Stenglin (eds.) *Semiotic Margins: Meaning in Multimodalities*. 125-143. London/New York: Continuum. 2011
- Painter, Clair, J. R. Martin and Len Unsworth. *Reading Visual Narrative: Image Analysis of Children's Picture Books*. Sheffield/Bristol: Equinox. 2013
- Ward, S. *Baby Talk*. London: Arrow Books. 2004
- 佐藤久美子『イラスト図解 小学校英語の教え方：25のルール』講談社 2018年
- 白井恭弘『英語教師のための第二言語習得入門』大修館書店 2012年
- 早川知江「英語絵本読み聞かせのための教室英語表現集の提案：英語が苦手な教員が小学校「外国語活動」を英語で行うために」『名古屋芸術大学研究紀要』第43巻 pp. 159-177. 2022年
- 早川知江「英語絵本読み聞かせのための教室英語表現集の提案：実践検証と表現集の改善」『名古屋芸術大学研究紀要』第44巻 pp. 179-193. 2023年
- 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_01.pdf
- 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』https://www.mext.go.jp/content/20220614-mxt_kyoiku02-100002607_11.pdf
- 萬谷隆一「小学校英語活動での絵本読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究」『北海道大学紀要 教育科学編』60(1) pp. 69-80. 2009年